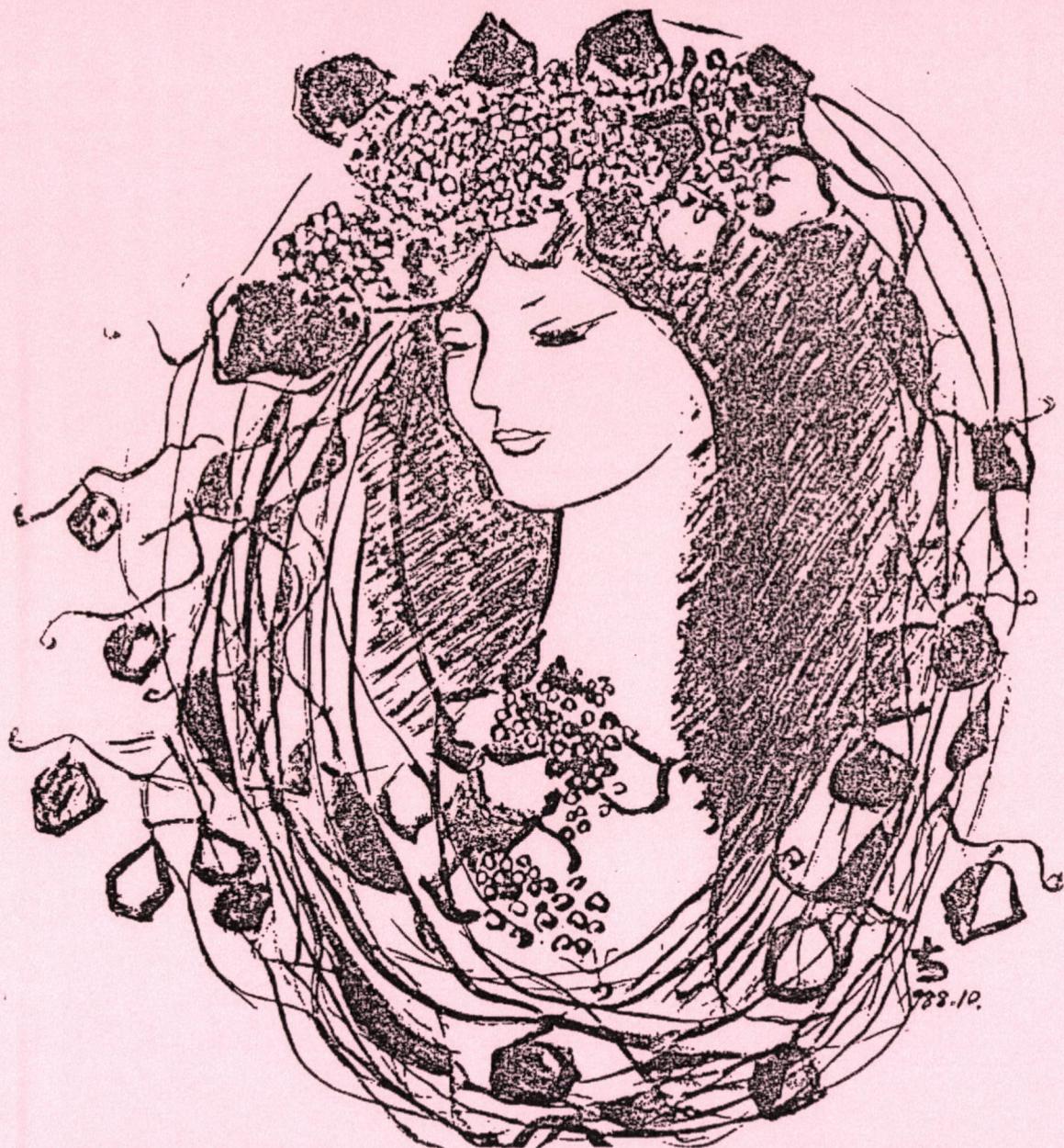


別冊・まきこ



第4回 千三忌・1988.11.6号

市松人形

渡辺真吾 3

戦前と今

・高橋ふさ 25

27

引き揚げ船の

演芸会

・佐藤ますみ 5

姑の戦争当時

・後藤忠子 6

「たにたえは、いまから
征かねねのた」と・おふぐろ
涙流すのよ……高橋二三男先生

針仕事

・小原 昭 8

ある戦死

・村上末子 9

千三郎

・鬼玉智江 43

まつを姫園書

「奉安殿」の慰靈祭・石川純子 13

あとがき

死者位置

・小原麗子 44

父と母の戦争

・小崎順子 21

■表紙・児玉智江

■カット

セキさんはホントに
背の高いがラーツとすたへでた
見れば頑丈な いつも二コニコでた
いや味 言われても
その場でおさめびた。

えつとも こいじ
ほうほうと燃やすて
眼めぢやめらや どすこゑん人たつたごも
煙りばりでなく
息子征して
息子に戦死れて
泣いてるしいやないか
ろじもじにも

八和賀町後藤野小原昭子の談

高橋セキ 1966年2月23日 没



「牛や犬の死んだようにしたくねえと思って、ながい間に
少しづつためた金で墓石つくってやったす。オレ死ねば、
戦死した千三を思い出してくれる人もなく、忘れ去られで
しまうべと思って、人通りの多い道のそばさ建でだす」
と、七十三歳になる母親の高橋セキさんは言うのだった。

（小原徳志著『石ころに語る母たち』未来社刊より）

市松人形

渡辺真吾

されると

小さな

人の形の灰
指の間から散った。

オカツハにイガ栗もまじって
四十三体

原爆で消えた
子供たちのたゞ
夏が廻ってくる
と
と

かろつ
遊びに来てみると
かよ子の出
ながかけ
いきて
こといい
かたいた
あるりり
ある。

3
三
二
一
体
と

4

小さな命を守り

身かわりに

こわされすてられた

ひとかた

いまは

こわされすてられた

小さな命のかわりに

そのときのまゝ

微笑んだまま

増え続ける。

貝からの方をすべる

白い砂の音かする

彼岸花の白が落ちる

沖の方から

黒い雨が走つてくる

眠ることのない



たまゆう螢火ゆうし
三つ折れ人形
音をたてて
立ちあかる。

(一九八八、一〇、七)

引き揚げ船の 演芸会

—母のノートから—

満洲はコロ島からの乗船だつた。

日本に帰れる嬉しさで、炎天下の、しかも木陰の全くない中で、何時間待たされ続けても長蛇の列は動かなかつた。

午後になり、いよいよ乗船が許され、目の前に横たわつてゐるアメリカの貨物船に乗り込んだ。細い鉄の階段を降り、船底の船室に入ると、そこは広くて豆電球だけがポツリ、ポツリと光つていた。終戦後、初めて見る電灯の明りだつた。夕食に白米の御飯に魚のみそ汁が渡され、これも終戦後、初めて味

■佐藤ますみ

わう御飯とみそ汁だつた。おいしさに泣けてしまつた。

船旅で一番困つたのは水だつた。水不足で子供のおしめも洗えなかつた。また、あまりの暑さに夜は甲板に出て涼を取つたりした。甲板だけは大きな電灯が輝き、まるで昼のように明るかつた。そのうち引き揚げ者たちの郷土演芸会が始まつた。手品をする人、歌う人、踊る人と、各自のお国自慢の芸を披露し合つた。この時だけは、誰もがすべての苦しみを忘れたかのように喜び、拍手を送り、えんえんと深夜まで続いた。そしてこの演芸会は、日本に着くまで毎晩くり広げられた。

昼は甲板に出てみても何も見えず、大海原の波・波・波で島影ひとつ見あたらなかつた。何日かたつて日本に近くなつたのか、遠くに島が見え、山が見え、木が見えた。鳥が飛ぶ。みんな喜んで歓声を上げた。二、三の魚船に会つた。日の丸を立ててゐる。みんなで「ばんざい！ばんざい！」と叫ぶと、魚船からは、メガホンで「御苦労さん！」と返つてきた。舞鶴港に近付いたらしく、港が見え、倉庫の立ち

6 並ぶのも見えた。ただもう嬉しさに涙があふれた。

岩壁には、日の丸の小旗を振つた人たちが、「ばんざい」を連唱していた。

上陸すると、早速、アメリカ兵が来て、大きな風呂場にみんなを連れて行くと風呂に入ってくれた。

入浴が済むと、頭から DDT をまつ白にかけられて宿舎に向かつた。宿舎では三日ほど過ごし、そこで県別に分かれて汽車に乗るのだつた。みんな苦しかつた満洲時代を語り合い、お互ひの健康を祈りながら、住所などを取り交して車中の人となつて行つた。

岩手県人は最後の乗車だつたので、ガランとした宿舎に残り、順番を待ちながら、気がせいてしかたなかつた。

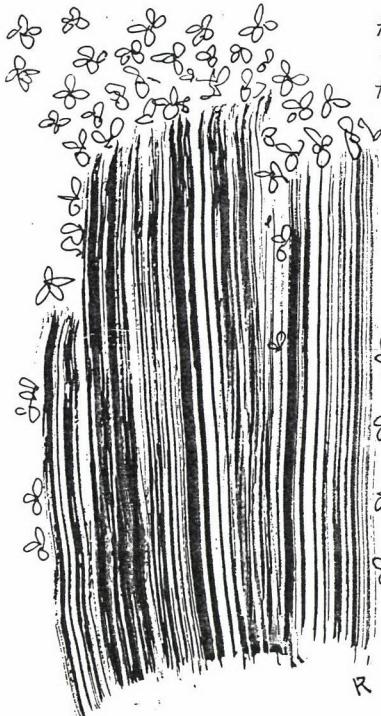
はじめて「千三忌」に参加することになり、終戦っ子の私は、「戦争」のことはわからず、恥ずかしいようですが、それでも、千三といふ人と、セキさんという人の話を聞いた時は、涙がボロボロ流れました。

生きるということは、生やさしいものではないんだ、セキさんのような思いをした人が、戦争当時は、たくさんいたんだ、と思いまし

た。

そこの所を考えなれば、現在ある、この

後藤忠子



生活にたどりつかないのでは、と深く思い、
気づきました。

そこで私は、姑に、戦争当時のことを聞き
出しました。

私が若い頃、姑はよく、「オラの時など、
こつたなもんじゃなかつた」とか、「今なん
だ、なんぼ楽だが、ほだくたねえ」と、言い
ました。

言われるたびに、また厭味を言ってとしか
受け取れませんでした。

が、今は、姑の今までの暮らしに興味を持
ち、少しでも理解出来たらと思っています。

戦争当時の家族は十人だったそうです。

ヤスエ、喜代治という祖父母、和七という
体の弱く、よく「腹痛デュー」と言う舅と、
キミ、イヨという小姑、喜一（私の夫）とい
う二歳の息子、それに、東京の知人の娘さん
が、二人疎開していたそうです。

喜七という姑のダンナは戦争に従っていた

と言います。

ヤスエ、喜代治の祖父母は、自分達の「ホ
マツ」にと、一反歩の畑しか働いてくれなか
ったそうです。

その他の田んぼと、広い畑は、姑が働き、
小姑達が少々手伝ってくれたと言っています。
それでも姑は、他の家の農作業の手間取り
にも出かけたそうです。

「田んぼさ、稼ぎさ行つても、喜一さ、乳
けさ来ねばわねがつた。」

「食うものも、青モミ入つていで、搗いで
食せだり。」

「米と麦と、カボチャまぜで食せだつた。
ンだとも、疎開の娘っ子ら食えねえって、食
ねがつたので、オラ、実家の藤根さ行つて、
米もらつて来たこと何回もある。」と言いま
す。

終戦後、ダンナは、帰つて來たのですが、
体が弱くなつて帰つたので、ほとんど働くこ
とが出来なかつたそうです。

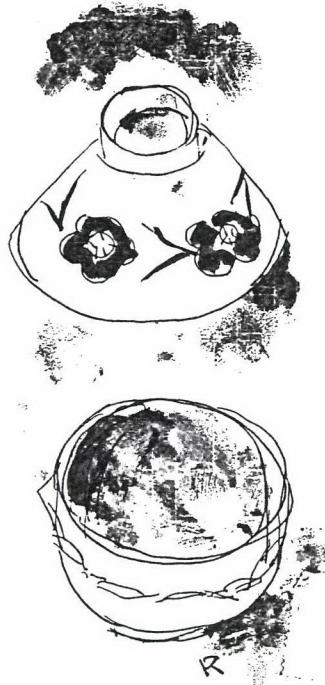
肋膜を病み、花巻療養所に入り、田を一反歩売って、その費用に当てたそうです。

何年間と、女手一つで働き、子供も生まれ、「喜一は、父さんは体弱えがら、中学校終わるとすぐ、東京稼ぎさ行つたんだもの。」

と言います。

ヤスエという祖母ともケンカのしどうしだつたりして、姑は気丈にならざるを得なかつたのでしょう。

今はまだ、元気で、「好きなことをしたい！」と言つてゐる姑は、いま六七歳です。



金仕事　川原

昭

松葉こんじゅうして
カンテラコ灯まし

木尻でくべなから

セキばつちや 針仕事してゐ

金仕事してゐ

なに縫つているのかなあー！
新しい布ふで

サルヘ縫つている

春の田植えに穿くのかなあ…
他所行きに穿くのかなあ…

ゆがつてくても
我慢してこんじくべなから
一生懸命縫つてゐる

「ある戦死」

村上末子

「兄さん！無事だったんですね。長い間ごくろうさまでした。
さあ早く船を出ましょう」

「すっかり掃除を済ませたら降りる」

兄は掃除の手を休めようとしなかった。夢にまでみた兄との再会、十四年ぶりの会話であった。

時次の兄Rは終戦の前年まで地元の村役場に勤めていた。その年の春、一枚の赤紙が舞い込み応召、出征先きは満州ときいた。

翌年終戦。やがて村から出征して行つた兵士たちの帰還の噂がチラホラ聞こえるようになった。しかし、生きているものやら戦死したものやら、Rの消息は以前として分らなかつた。思ひ余つた時次の家族は、当時の留守家族がそうしたように、ラジオの尋ね人の番組に依頼、兄の消息を待つた。全国からの反響は殊の外多く、沢山の手紙が寄せられたが、いずれも「今どきに居る」という確実な情報ではなかつた。唯一、家族を安心させたのは「終戦まで生きていた」という事実であった。

戦後七年経つた一九五二年六月五日、待望の便りが家族の元に届いた。「現在平壌分区衛生科という所で元気に働いている」と書いてあり、更に、近日中に転勤になるので、こちらからの時次は掃除の手を休めない兄に声をかけた。

手紙は書くが、よこしてはならないとあった。「Rは生きていた」。家族は狂喜した。特に母の喜びようは格別で、時次には生まれて初めてみる母の笑顔に思えた。

その後、年に二、三回家族の元に便りを寄せており、Rの便りは自分が帰国したら一生懸命働いて、今までの償いをするから、がんばっていて欲しい、父母には長生きして待っていて欲しいと常々したためてあった。実はRの出征後に、父と長兄は死亡していたが、家族はその事には触れていない。

一九五七年十二月、Rから吉報が舞い込む。それには最後の引揚船「興安丸」で帰れる旨書いてあった。その日から時次の母は郵便配達夫が来る度にかけよって手紙をもぎとったという。翌五八年四月五日、待ちに待った便りが届いた。それには二週間以内に帰れると書かれ、十四年ぶりに祖国の土を踏む喜びの心情が紙面いっぱいに溢れていた。そしてその日のきょうである。引揚者とその家族に当てられた休憩所に三時間程いた。十四年間の兄の空白時間をどのようにして埋めるか、戦後の日本経済、文化、政治のめざましい進展とその変貌をどう説明したらいいものか、時次は迷いながら慎重に言葉を選んだ。母はただただ「よく帰ってきた」を連発するのみであった。

予定の時間が来て、東京へ出発するバスが宿舎前に並んだ。一緒に玄関に立った筈の兄の姿が、バスの乗客の中に見当らない。時次は又も宿舎に戻つてみた。そこでも兄は人々の去った後の部屋の掃除に専念していた。引揚者の中で独身者はR一人であつたらしいから、その事がもともと責任感の強い彼をそうした行動に走らせたのだろう。

東京では三越デパートを見物した。「百聞は一見にしかず」、下手な説明をするより、日本の実感を知つてもらう絶好の機会だと、時次は思った。

戦前とすっかり一変してしまった都会の様子と、物の豊富なのにRは驚き通じで、時折深々ため息をもらした。車中でRは話した。

中華人民共和国五ヶ年計画プロジェクトチームの一人であった事、給料が日本円にして二十四円であった事等を。日本では、当時卵一ヶ八円であったというからデパートでその値段を目の辺りにしてきただけに、生活の不安がよぎったのだろう、兄はしきりに時次にその事を訊いた。

時次の兄は小学校の時から首席で通した秀才であった。しかし其の秀才にも、日本の円と中国の元との換算が出来なかつたようだ。

「果たして日本で生活できるのか……」。

Rは何度となくこの言葉を口にした。

東京にも、仙台にも、花巻駅にも、Rの同級生たちは出迎えた。この間、友人に囲まれ放しであった為に、母と時次はろくにRと会話ををしていない。

村の駅には、地元小学校の全校児童が出迎えていた。家に着いたのは午後一時頃であったが、その間も道行く人々にもみくちゃにされる等一兵士の十四年ぶりの帰還は、凱旋將軍のようなファイバーブリードであったという。村人たちは夜になつても時次宅に押し寄せ、その行列は数珠つなぎであったというから、村あげての歓迎であったのだろう。それは時次の家は勿論、Rがかつて村人たちにみせた業績とその誠実な人柄によるものであろう。

その夜、かつての同僚、青年団の仲間、親戚、同級生等、Rの帰還を祝う人々は夜更けまで歌に踊りに興じた。Rの居ないのに人々が気づいたのは、それから大部経つてからの事である。モ帳らしきものを数冊出して、女たちに「くどにくべろ」と言

つたという。女たちは何の疑問もなく、燃え盛る「くど」にその書類を投げ入れた。一人の親戚が言った。
「便所に行くんだら、ゾウリでも何でもいいべ」。Rは「いや覆いてきた靴を出せ」と頑強に言って外に出た。

人々の酔いは一ぺんに吹き飛んだ。それから大騒ぎとなり、心当たりを探したが、とうとうRの姿を見つける事が出来なかつた。

翌朝二〇〇人近い人々によつてRの搜索が始まつた。身内の数人が墓地に急いだ。そこにはRの来た事を証明する「靴跡」がはつきりと残つていた。一同に不吉な予感が走る。それから一時間後、裏山の木に首をつって死んでいるRを発見したのは同級生Aであった。一九五八年四月二十九日、天皇誕生日の夜であつた。

「やつと帰つてきたのに、何して死んだのやー泣きわめく身内の光景が今も瞼に染みて離れないと時次は言つた。

「あまりにも変貌した祖国を目の辺りにして、生きる自信を失くしたのではないか」「価値感の切り換えが出来なかつたのではないか」等々、生きている人々の勝手な想像はつきない。しかし、死者の本当の心は誰も知らない。

持ち帰った荷物の中にあったのは、こちらから送った手紙や、家族の写真だけであり、中国での十三年間の暮らしの分る書類メモ、日記のたぐい、果ては写真まで一切証しとなるものにはなかつた。身辺のものを残さず処分しての帰還であつた事を思うと、Rの死は予定の行動ではなかつたのかと、私には思える。「天皇陛下の為に」が骨の随まで染みた旧帝国軍人は、その天皇の誕生日の夜に33歳の命を断つたのである。

あれから三十年、今年九十三歳のRの母は今も元気に生き続け。戦死ではない死を遂げた息子の母には軍人恩給はさがらない。母が今も受け取れるのは公務扶助料だと時次は言つた。

興安丸最後の帰国者の中には、現在伊藤忠商事相談役、瀬島龍三氏が居たことを私はこの拙文を書くに当つて知つた。この人はかつて経団連の会長、故土光敏光氏と共に行革推進の中心人物であった経済界の大物である。彼は月刊誌PHPの中に次のように書いている。

中略「十三年間の空白を埋める為に、毎日図書館に通つて十三年分の新聞を読みあさり、自分の身心を少しづつ日本の現情に合せて行つた。略と。

激しい時代の流れを乗りきつた人もあれば、Rのように泳ぎ

出すこともせず激流に呑まれた人もある。

戦争は前途有望な多くの青年の命を奪つた。たつた一人息子に戦死され、看取る人もなく佗しく死んで行った親たちがどれだけ全国にいたか知れない。しかもその為に絶えてしまつた家もある。高橋セキさんの家も絶えた。

奇しくも今、昭和が終ろうとしている。この拙文が小冊子に編まれる頃、おそらく事態は変つてゐるだろか、一人息子に戦死された父母の深い哀しみをみて來た私の胸は複雑である。泉下の私の両親や、セキさん、そして昭和史の最後を生きるRの母はどんな思いで「天皇の病い」を受けとめているのだろうか。

為政者はどう繕ろうとも、昭和史から戦争は決して消えない。血と涙染みた昭和が枯れて行く

根の里便り

姫白書を開つま

■ マッカーサー恐ねくて

愛国婦人会も何も、戦争終つてみな解散させられたの、マッカーサーに。

戦争終つて、世の中変わつて、気楽でカタゴド良がつたチヤ。

自主的に民主的な団体ならさしつかえねて言われで、また婦人会出したの。

そいづで忘られねの、和尚さんが戦死者の慰靈祭やるべとした時のことヨ。

本淨寺の和尚さん、活動性のある人だつたもな。

県南の花巻がらこつち、今の選挙区の二区全部の戦死者の慰靈祭すつべて⋮⋮応召家族全部さ慰靈祭やるがらて、役場さ通知出して出席とつてもらて。

御遺族みな集めで、拝んでお説教聞がせで、その上に踊りつコだの慰安会のようなものすつべどしたの。

・石川純子

「奉安殿」の慰靈祭
—愛國婦人会の戦後—

そん頃。

——ン、昭和二十二年か、二十三年頃でね——

が？

全村挙げでお寺のやるごとさ、協力する気

だつたの。

したキヤ、その二、三日前になつたキヤ、
そいなごとやつてわね（やつてはいけない）

「やめろ、やめろ」て騒ぎ始ねだの。あの頃
、進駐軍が何があつと駆け廻つてゐ時代だつ
たもネ。

招待状も出してスまた。みんなに見放され
で、今さら困て斯まで婦人会長のオレさ、和
尚さん、「相談したいがら、来てけろ」て。
「止められスか？」て聞いだキヤ、「止めら
れね」て、言うけし、

「一体で、和尚さん、何人さ通知出したの
ス？」て。

したキヤ、「二万人」だて：

「なんじよスで、どこさ集めるがすタレ。

(どのようにして、どこに集めるのですか)

お寺だら、二百人も入らねがすべや」

「呼んだたて、皆来ねべ。二千人位がな？

学校の講堂借りで、お寺ど学校の間さ渡り板
敷いで、履物履かないで会場作る」て：

村長もわがね、（寺の）総代はむぐれる、
学校でもされかまねドなつて（かまわないと
なつて）婦人会さ、すがつて來たのさ。

戦争終つたキヤ、戦死者が戦犯にされだべ、
戦死者ねぎらう会は罪どなんだもの。

マッカーサー恐ねがらて、かまねでおぐの
いいが？（かまわないとおくのいいか）

「戦死者の奥さんだの、お母さんだの思う
ど、かまねでおがれね、会長さん、やれるだ
けやつてみスペ」て、ホニ、明日と迫つた時
だつたなア。

結局、和尚さんと婦人会どスて、やる氣ス
たの。

■婦人会の味噌汁

なんぼ人来ンだが、味噌も塩もねエ時代、

ホでも（それでも）味噌汁ぱりも食せッペて
班長さん達さ、汁椀コで一つずつ味噌寄付
してけろ、大根だり芋コだりも：て決めで。
味噌も塩も買うようねえ時代だつたもな。

そしたキヤ、各部落の班長だち、

「オラも出す、オラも出す。どごそれに行
つたキヤ親切にされだつタ：」て、味噌、大
つきな桶さ、三十部落の人だちリヤカ一での
つそりつけて来て：持つて来ねがつた婦人会
ダ、戻り帰つて持つて来タ。（笑）

したキヤ、その日になつたら、来るわ来る
わ、こつちの街道、あつちの街道、ぞろぞろ
ぞろ、南都田の道路、衣川道路、水沢の方か
らも、六方線全部が満員なる位。

「一体で何起ぎだのダ？小山で何アンのシ
ヤ？、水沢の駅えらい混雜だ」て、駅長さん
から駐在所さ電話入つたツも。

さ引つぱつててスまたの。
したキヤ、村長ダ魂消たまげで、和尚さん役場

あんまり人来られで、すつかり恐ねぐなつ
てスまでハ、和尚さん一日一杯怒い、ペくられで帰ス
てよごされね。

一日一杯だヨ。こんでハ、慰靈祭まるきり
メチャメチャ。

戦争をしねて言いながら、それでて戦死者
を待遇したり接待する事業すンのだがら、進
駐軍さ知れだら、埒らもねえごとになるてハ：

和尚さん思つた通りやらせだら、立派な催
しだつたべ、その日になつて怒り始はねで（怒
り始めて）、人来てがら招待主怒つたタて：

その日お説教頼まれだ和尚様達、京都だの
仙台がらも來たツし、二十六人どか來たつた
ンだド。

清志さんて、ラジオ屋の二階、その人達の
控室だつタ、その和尚様達だて誰も接待する
人もいね、一体で何じょなごどでこんなにな
つたのがて、怒つてだつたツ。
ホニ、昼飯も食せられねがつたべ。

寺の総代達てば、このクサレ坊主、何してこつたらごとして！て、十人ばかりしてケンカして、そいすも飽きッとハ、ポカンと壁さ寄つかがつて：（笑）

あつちでもケンカ、こつちでもケンカ、来る人来る人一杯で、何じよに接待してよいのが。

まるつきり指揮する人、一日いねのだもの。

「何するどこだ？ちゃんと慰靈祭してもらうべて来たのだ」て、そつちでももちやくちや、來た人だちもケンカ。ペテンにかけだみでなもんだもな。

「誰悪いのだがわがねげつとも、こござ来たのは御遺族様ですよ。

息子亡くして本気なつて來たの、お粗末にしてられね。懲役になつてもいい。呼ばれだ人だちに罪ねえがら婦人会ダ頑張つベス」て：それにしたて、どこさ入れ申スたらいいべオレ、そいづでテンテコ舞いして。結局、

学校全部借りで入れる外ねくて。三十八教室全部だヨ。

「なんとかお願ひスたい。見でのわかる通り、この位けの人だもの：」て、頼んで頼んで：。

日曜日でねくて、生徒いだ時だヨ。

校長さんもよーぐ学校ずらり（全部）解放してけだつたなア、あの時。

ホデも（それでも）貸すど決めだキヤ、先生ダ、さつぱど帰つてスまで、学校さ寄つてつかねがつた：恐おそれねがつて。

マッカーサーなんかに見られだら、皆しょつ引がれッから。

遺族は、戦争犯罪人と見なされでだ時だもの。

婦人会ばかり「巡查さん、二日間だけ許してけらいん。戦争協力して、マッカーサーの監獄だり、沖縄の重労働だり、直接談判だり行きますから。サンキュウベリマッチ位語れますから」：て。（笑）

ンだたて、来た人だちの不満、さつぱど婦人会きたの。

責任者いねのだもの。

あん時、和尚さん、世話係さ桜つコの徽章作つてけでだつたもネ。

「その徽章コつけだの、何ダ！」

「おめだち、何の印つけだのや？」「これア、何のざまだ」だのて、胸元つかんで言われんのもあれば、怒られでハ：

ンだたて、ここで止められぬ、とにかくお汁運べ、運べて、熱い味噌汁差し上げろて、お汁、皆さ二杯も三杯も食せだの。

四月の末で、まだ寒めがつたがら、熱いの一生懸命、それ運べ、それ運べて。

ナニ、婦人会が持つて來た野菜だのなんだり、もれくれど入れだ味噌汁だつタ、家にいでも味噌汁も満足に食われね時代だつたがら「この節に、こんな沢山いただいて」て喜ばれだつたなア。

ナニ、ねぐなつたら塩混ぜ混ぜ、ふやして

ハ、その塩だタて、岩塩だつた。
——岩塩て知つてッか？

溶かすと下のほうが土で、澄まして上の汁コ食うのが人間の方で、下の方は動物に食わせる塩どしたの。そういう時代に、お汁食わせでやつたんだもの。

■「愛國婦人会」時代の力噴き出させて：一番、和尚さんさえ放してよこせば良がつたの。

村長も村長、切れねえ村長だもなア。恐ねぱり恐ねくて一日おしゃつげでで。（おさえつけておいて）

こんなに遺族モヤモヤど集めで、こごさ進駐軍來たら、何じよするてぱり思つてハ。婦人会の人たちばり、

（沖縄さ引つばられるつツ、マツカーサーに連れでがれつツも、皆で行ぐベスな）て。

（笑）
ナニ、終つてがら駐在所の前通るど、

「まだ、マッカーサーがら、罰則来ねがス
ペが？」て、わんざわんざ聞いたもんだ。（
笑）

おまけに、夜は、夜通しあるつて聞
いだから泊まる氣で来たツ人だちもいで：：
何じよにも（どうにもこうにも）、裁縫室
さ火鉢に火おごして泊めッペドしたキヤ、宿
直の先生、学校、今夜の十二時までスか貸す
約束してねドなつた。

この人ダ、夜中、どこさ出すべや？

朝早く出はて來たおじいさん、お婆さんダ
、膝と膝おつけで、風呂敷コ枕に寝る人もあ
れば：達曾部なんツ遠ぐがら來た人たちもい
たンだもの。

宿直の先生ビオレ、ケンカしたの。

したキヤ、そいす聞いて巡査さん、一あの

巡査さん、良い巡査さんだつタ、

「消防の奴ら、なにしてる。この位婦人会
忙スのぬ」て、消防集めで、

「この人数配分すッから、おめだちの家さ
連ちでつて泊めでけろ」て、してけだの。

「布団のあッとこさ宿取つたがら」て言つ
ても、

「どうぞ、このまま、ここで夜暮させでく
ないん（下ださい）」て、なかなか起きねが
つたヨ。

講堂で、劇だの踊りつコするごどになつて
だ婦人会の人だちは、白粉コつけだり、男の
ように眉逆さに描いだりス（笑）、一日暮
らしたな」て、後で笑つたタ。
はつぱ（さつぱり）出番ねのだもの。

朝からお化粧して、

「会長さん、いづ踊ンの？」

「もう少し待つてで」：てぱり、待たせで

終つたの。

相撲甚句だの、瑞穂踊りだの、いろいろ
計画あつたの。

初めつから、婦人会は料理と、その踊りコ

の二つ受け持つてだんだお。

肝心の和尚さん、おしゃつけられで、やッ・
とこす・ツ・とこ、お汁食わせで、にわかに婦人
会尻ぬぐいしたンだが、その位力あつたンだ
な。

あの愛国婦人会時代の、婦人会持つてだ力
を、そこさ噴き出させでスまたの、

誰も恐ねがつたべ。

巡查様だ夕て、消防団だ夕て。

したたて、さーどなつた時、向こう見ずに
やれンの婦人会だつたンでねーが？

あン時、戦争犯罪人がうるせがつた時だも
の。

ンだんだ、おじいちゃんも（戦争中、村長
一戦争犯罪人で公職追放なつて、製材所やつ
てツ時だった。

ンだから、焚き物はオレ出して、製材所の
サ・ツ・パ板運んで、ドカドカど焚がせだつた。
ンだんだ、四月の二十六日だつたな、あの日

丁度オラ家で馬屋の堆肥の肥出しで、人頬
んでいた時で、本当は出られぬ時なのに、二
日も三日も家空けで学校で奉仕したの。

人頬んでツ時「沖縄まで行つてきます」な
ンて、出はつて歩いて、おじいちゃん、何と
思つたンだが。

■「奉安殿」使つての慰靈祭

— 何で和尚さん、そいなごど計画したがて
？

純子さん、「奉安殿」ツの知つてツか？

そいづ戦争敗げでいらねぐなつて、こいづ
神様でもなんでもね、当たり前の人間だドな
つて、教育勅語など読まねぐなつて：

他の町では、あの奉安殿、何じよしたつた
ンだが？

この村ではお寺の和尚さんが欲スで言つて
名乗り出で。戦死者の写真を飾つて祭るがら
欲スで。

そこで、お寺ど学校の敷地続いでだがら、

唯、つ・つ・つと引っぱってたの。

それで写真集めで慰靈祭すッペどして、この騒ぎ起ごしたのヨ。

その筋から言えば、悪いごどではないもな。奉安殿の中さ、写真飾つてもらうのは有難いごどだもの。遺族はみな本氣すッさな。

ホニなあ、こいなもちやくちやツ時代もあつたンだな。

だりヤ、戦死者が、戦犯にひっくり返つてスまたンだもの、誰もなんじよしたら良いがわがねがつたの、

ホデも（それでも）婦人会ダ、良くやつたちやなあ。

そもそも愛國婦人会時代がらの力よ。

オラだぢ悪ごどやつたンでねえもの。
（わり）何も来ねの、来ねの。

■ ハムスコの遺骨來たとき、

コンかこつたにたつて來たつてか
つて、箱さかぶりついたス。

一つへえつてらつたス。

本当にハムスコたへか？

うたんへか」と思つて、そ

の骨コナメでみたス」

「十三の味も匂いもしねえレ
ハムスコたか、どうたか、わから
ねエかつたのス。それでし、これ
かかムスコたか、と思ふほかしかたな
かつたのス。

うたんと決めてから、気持やす
まつたスレ（石ころに語る母た
ち）

今迄、あまり他人に話したことがないけれど

「父と母の戦争」

小崎順子

仙台の旧制中学を苦学して卒業した父さんは、仙台市役所に勤めていたつたけど。昭和11年に結婚して、一年ばかり農業をしていたつた。

家が没落したから田畠が少なくなつたので、満州警察の募集があつたので、独りで満州に行つたの

広い満州を手に入れたかに思つた日本は、国力のありつたけをそそいだ。その時の総督が水沢の産んだ後藤新平だつたようだ。

父さんの兄弟は3人いたつたが、3人共皆満州にいつた。一番下の弟は満鉄（満州鉄道）の建設に入り、中の弟は徴用で兵隊になつて行つた。

結局満州で戦死してしまつたの。

おまえは3才の時オレと一緒に満州に呼びよせられて行つた。満州で一生過ごす覚悟で渡つたのだつたな

舞鶴からセイシンに上陸して満州のトモン

に三か月、その次ジュウリツボに二か月いたな、点々として、やつとソオリンで二年ばかり落ち着いていた。

父さんの仕事は警察官だつたけど、中国人と韓国が入り交じつた町に住んでいたつたといひてい、警察つて言うとお怖がられるんだけど、日本人は一人だけだつたからずいぶん親切にされたの。

おまえのほうが言葉を覚えるのが早くて、

買い物に行くときは通訳として連れて歩いたもんだつた。

三か国語をうまくはなしていたよ

今いくらか分かるか？

「そう言わても今はどんなに頭を絞つても日本語以外は出てこないよ、きれいさつぱりとお返ししたみたい、覚えていればよかつた：」

終戦の少し前に学校に入れるためといつてお前だけ帰してよこした。

「やつと中国語と韓国語を話すようになつたところで、また言語中枢の混乱だつたから、早く外国語を忘れなければ：と思つたものだつたよ。独り住いの祖母にあづけられたのだけど、私にとつてはしらない人だつたから。周囲は日本語、それだけでも子供の私には驚だつた。おまけに、親戚といつても忘れた人達ばかりの中においていかれたのね」

オレは、直ぐ満州に帰えらなければならなかつたからな、

「なぜ？ おなかが痛くなるほど寂しい、父や母に会いたくても余りにも遠くてどおそればいいのか：、学校でも早生まれだた私は一ぱんちいさく、泣き虫、と仇名をつけられていたの」

オレは反対だつたけんと、父さんに逆らうこととは出来なかつたから：。

その間に、正博（次男）が生れたの、ダイサカや、アンズケンにもいて、そこで終戦を迎えたの：。

引き揚げまで的一年

：だつて、どこに隠しても狭い家だからす
ぐ見付けられてしまうし、

いろいろ考えて、父さんが

「終戦になつてから、帰るまでの一年はど
んなだつたの？」

父さんも、正夫（父の下の弟）も仕事が出
来なくなつて、今まで満人がやつてたクー
リー、水汲みのような力仕事をしてた。

其ほか、内職で巻き煙草をつくつて売つた
の。とつても良い金になつたつた、面白いく
らいに。

そのうちに、八路軍（中国の政府軍）が十
人も二十人もダンガダンガと、土足で入つて

きて手当り次第持つていつた。二人の子供を
ぎつちり抱いてガタガタふるえてばかりいた
いた。

いつでも逃げられるように、大事なものを
ぎつちり詰めて、隠していた袋があつた。
それ运持つて行がれたときは、ほんとにが
つかりしてしまつて、

そんな事、七回ぐらいあつたかなあ。

「草履の上の方を、キレイにナイフで縫い付けて、
お金を入れて、また蓋をして縫い付けて、
泥だらけにして土間に転がしておけ」って言
うから、

ピクピクしながら見ていたら、どうぞや來
てその草履踏んずけて行つてしまつたの。

それからだいたい飲み込めたから、着物な
んかは絹のいい物を解いてしわだらけにして
結んで、部屋に投げておいた。

其かわり、木綿とかあまり良い物でないも
のを奇麗にのばして箱に入れてたら、持てるだ
け持つて行つたつけ：

終戦から一年近くたつたら、全部の押し入
れに自張りをして、中の物に手を付けさせな
いようにして行つた。

そして、米と味噌とキウリの漬物を四斗樽

いつぱいに貯えておいたの、それも四人がかりで持つてがれてしまつたときは、何持つてかれたときより悔しいと思つたつた。

「食べ物をみんな持つて行かれたら、何食べたの？」

コーリヤンと粟少しばかりあつたつた。

それから間も無く昭和二十一年八月十五日になり、丁度敗戦から一年目に八路軍が来て父さんが羅致された。

子供一人おんぶして、一人は抱いて隠れてガダガタつて父さんが連れて行かれるの見てだの、



戦前と

今

てられていて奉安殿へ教育勅語の原本
と天皇・皇后の御真影を奉置する場所
から、四大節の式の時、教育勅語を入れた桐の箱を運びのか、教育先生であつた。礼服に身を整え、恭しく捧げ、
眞っ白い手袋を今でし眼に沁みるよう

校庭で遊んでいた私たち
最も敬礼をするのだった。
。

朝礼の時、休めの姿勢で校長先生のお話しさ聞いていても、「畏れ多くて天皇陛下におかれましては……」の言葉に、素早くキチツ足を揃え不動の姿勢をとり頭を垂れた。

このよう^なに教育^{きょういく}をうけた私たちは
戦争^{せんそう}にたり、お国^{くに}のため、天皇陛下^{てんのうへしや}の
ために、勇ましく出征する兵隊^{へいたい}さんを

駄頭に送られ、どうして女に生まれた。うと歯きしりする風いたな。
 ひどいお腹で、絶きのあたった作業服に、破けた地下足袋を穿き、夜勤の火薬運搬のトロコ押レをした。学徒動員の地でも、支那事変で父が戦死した友人と二人で、従軍看護婦たて戦地に行けるから、赤十字看護婦になることを誓った。

皇軍も留守家族も信じて疑わない。勝利の道であったのに。勝ったのに全国民、命を捧げて戦って来たのから敗戦のショックは余りに大きかった。

そのとき、男の子も四人の中、二人戦死、一人は未帰還だった六十過ぎの父親は、思わず叫んだ。天皇陛下、まんまとしていられ

なやへかや
 それを聞いた人は、「まんづたまけた」と言うもんたつけしと言っていたのを、今まさまさと思いつ出すのである。

吉向橋セキ・語録

「これまで、千三をオレの子ともた、オレの子ともた、
 と思つていたが、間違いたたス。兵隊にやりたくねえと思つても、天皇陛下の命令たれはしかたねエス。
 生まれた時から、オレの子ともた
 かたのス」

一 小原徳志編・石ころに語る
 母たち山へ未来刊より

にうの花

死線を乗り越えた言葉は
激しくかかるい

雑草の中の
にうの花に似て
包いを激しく漂わせ

異国の地で夫を失い
育ち盛り四人の子を抱え
海を渡つて引き揚げてきた姑
は

・高橋 つか子

二ほれ落ちそ うな言葉を
現状に包んだまま咲いている

私は洗いあかるさにひかれ
沈黙した日々に潤いながら

満たされていく

曇天の日が続くと
疲労の塊か脚腰にくると
痛みを訴える

「娘だけは大事にして
子にならさせた」



「なにだ、えは、しまから
(4歳) 征かねのだと」と
あふぐる涙流すのよと

・高橋二三男先生(57歳)

北上市守門般直口・は

語る

・遺骨は軍神

俺は、昭和六年生まれた。若けえて、
若けえて、六十にならへぢや。
又、二年たら、六十にならへ。
今、五十七んた。一同生まれたから。

俺は、昭和六年生まれた。若けえて、
親父が言うわけ(笑)
俺は、(笑)
次男たか、双子の戸籍上は三番目。
二三男の名前付けて、
死んでたすすめ。

昭和六年一月四日生まれ、
嚴密にいえば、十二月生まれた、たう

むかし、さうだったへ。
和賀町の山に生まれ。

生まれたのかういえは、
兄弟は、男たけ九人。

おと、戦争一年続けた、
「東條英機」表彰されたへ。

親父、言つただよ。

う
た
か
う
、
現
世
で、
七
人
サ

新潟県立高等小学校の卒業生

うたから、今の中学校二
年生の時に、ホラ

戰爭中
T-1
K-1
S-1

「少年兵、食けろ」

小川九一さんか、山口小学校の担任で、力には、児童の教師たちが言うわけ

校長
12
13
?

元の場所

「男子」

二
三
四

「少年兵」

昭和十九年

「うう言ひわれて、俺の同級生がサ

有 T2. い
レ 12. 行
下 ません
上 て 言
下 T2.

7
T₃
h
T₂
I..
L

「オラ、長田さん」

才弓家之守うねぬ

すたう

一
奥
寶
林
卷
四
乙
白
本
男
子
レ
云
召

元和文庫

四月廿二日晴

卷之三

30. 「進んで征きます！」と、

こう言わねえ。
避けられぬから、たんたを！。

うたげれども、牙^{イシ}同級生か？

即かれても

「うたつて、俺、家のことを考へれば」

なんたつて、征^{シテ}けねエ！

泣きだから

訴えそんだけ

か？ 即かれても、さうぞ

か？ 即かれても、はたかれて、さうぞ

うたつたう、大^カいに、やんたが思^シて

すても、T₂。 やんたが思^シて

俺は、やんたが思^シて

う世、征^{シテ}かねぬ。 イン

二男たつし、立派^{タツバ}。 思^シてうたから！

兵隊^{ヒンたい}すの、立派^{タツバ}。 思^シてうたから！

うたつたう、考^シねぬ。 やんたが思^シて

「軍神^{ぐんじん}」とて言わねえ。
死んだつて、「神様^{しんさま}」になれる。

つて、いうとて、俺、信じたからね。

ハニサウハニサウして、

召集令狀^{しゅうしりょうめいじょ}、さたんに人^{ひと}を送り出すんだ。

俺、横川自駆まで行^くたんたを！。
兵隊^{ヒンたい}送り出した汽車で、遺骨^{いこつ}を帰^かる。

ええと、俺は、あまり不思議^{ふしきぎ}と

思^シわねか？ た。

牙^{イシ}の遺骨^{いこつ}は、軍神^{ぐんじん}たつ。

俺は思^シつたの

うたつた、命^{めい}たんてごむ
やんたをね。

死んt₂て、神様t₃に思t₂い出t₂してみねt₂。僕t₃に生きかえらんt₂たt₂でせ。生の塙t₂の二t₂を、僕t₃に思t₂い出t₂してみねt₂。僕t₃に死ぬt₂たt₂で、

兵隊t₂が征t₂つて、死んt₂た遺骨t₂が帰t₂つてくt₂る、見るスサ。死ぬt₂た、神様t₃に志願t₂するのt₂からt₂で、俺t₂は、日本の國t₂を守るるんt₂つて、

「微t₂兵t₂」に征t₂かねねのt₂からt₂で、

・ 判子を隠す

31
1 そして次、受験t₂に行t₂たのt₂サ。
行t₂たのは、生t₂の中t₂で、三人か四人。
実際会見t₂のほ。同級生t₂は、男、十六。

1 判子、窓t₂時t₂12
こういう事t₂だった。
親父t₂はt₂サ、こう言t₂つた。
「こうせ、二十になれば、
征t₂かねね

ます、受験t₂に行くことにする。行t₂く時t₂12 窓t₂の志願t₂するのt₂からt₂で、
志願t₂するのt₂からt₂で、三十何人、男女共学t₂たt₂からt₂ね。
「微t₂兵t₂」に征t₂かねねのt₂からt₂で、絶交t₂、
生t₂の前に征t₂くのt₂云t₂は、なんt₂たt₂て
親の承諾t₂取t₂うねね。生t₂の時t₂、十四t₂か

あふくろに、怒られもす。たつた。

叩かれもすたつた。

外見せねえような、列車でサ。
夜はり、歩かせたの。

「たはにたえは、いまから、

たいた、身の頃、

空籠衣で、やられたからね。

後で、また、厳しいこと言われたとも。

・ あふくろは国賊

今、黒沢尻西小で受けたのな。

一つはいT2つた。

北上から、沢内、東和町も含めて、
和賀郡全部だから。

そこで筆記試験受けサ。ハツハツ

採点されて、まず、合格だべ。

一定の身体検査も受けサ。

二、三日待って、オニ次検査です。

霞が浦航空隊まで、行つたわけよ。

あそこが、オニ次試験。

団体列車で行つたの。兵隊が征く時、

一方月ぐりえ、たつてから、
合格通知きた。

役場の係が持つて来たわけよ。

合格した！って。俺は、ハシサイ

すて、校長先生なんて、

「えかつた、えかつたしつて！」

山口から、どう一人合格すたの同級生。

俺は海軍、彼は陸軍だった。

俺は、その合格通知まつてサ。

あれは、春先たいたいやな。

おふくろか、田んぼで、田起こしすて
 うた、ぬ木鉢で。さて、俺行つて、
 か、ちやどれたしエレフて言つた。
 すたきや・おふくろ、
 たにたすごとねエ、とれた
 あや！ ッ、やつはりか
 四本鉢、投げてさんてサ・田の畔ハタケ
 てさんたわよ。田の畔ハタケで、
 いま思うと、俺、情けねえ人間サ。
 うたから、涙出でくるんだけもね。
 なんて、喜はね云々。レ
 すたきや、あふくろ、ホロッ、ホロッ、
 征二十
 ねにね
 たう、

なにすて！ 同じ生まれできたら、
 早く死ね、死ねねのたゞ。レ
 たんて、こんな自出度ニ、
 喜んでけねえのたゞ！ レ
 たんて、早く死ねねのたゞ。レ
 何回くり返された。
 「母親っていうもよ、
 前はりでねえ、お前たんち、お
 が、生きるかで生んたんち、
 思うへ、一日で、長生きすてけろ。
 すたきや、二の馬鹿たれ！」 レ
 んだんたゞ、おふくろすの。そ
 ういふも死。
 う言われたつて、分うね云のス。
 くされ、おふくろ！ レ
 軍國主義、頭さ入つてらへすサ。
 思つたわ

「憲兵呼ぶ！」 「警察呼ぶ！」

「国賊！」って叫んだ。

「あふくろは、

「何言われたって云々。呼んで云々。

銃殺にならなかもすればね云う。

親身の子ともが生きるこゝ、一番

涙流すのよ。

俺けこせえて（腹立て）

帰ってさんた。

俺けこせえて（腹立て）

親父T2..

氣持T2..

親父の方には

男たたへス、軍調

親父T2..

にへス。

う、俺、七ツ入り（学

結果的には二十年の八月入隊する

ていうことだ。うた云々や、

先き生まれの連中から、いんじん征つち

せつたからだ。たから、俺、一番最後

に残されてしまつた。

さして、ホレ、空襲が激しくなってさ

んたから、九月一日は延期する

言われたの、入隊を

といこたけい、奈良県分隊。

おえで、八月十五日は終戦だ。

結果的には。

俺より先に生まれた人たちは、

征つて、空襲にたつて、死んでるのも

なる。征かねまく、俺は生きた。

うんたんたんたん

・負けた日

「八月十五日」の氣持は、
 また、二す、分かねえじり、
 たた、今、思い出してみれば、
 天氣は、良かつたなあ！
 倥々、兄貴、爺さまと、すてサ。
 ホラ、後藤野飛行場で、この辺り
 爆撃が激すぐね？ たもんたからサ。
 一生縣令、家の後さ、防空壕掘つて、
 のよ。そすたう、ホラ、
 「触れ込みでえなの回つたんたよな。
 「天皇陛下の重用な放送があるス」
 ヒカ、なんとかたずねる。
 十二時にな。確か。
 おらほさ集まつたけ。
 言つたまよ。云々て、
 倥々下、

「重大ニュースたつて、いう話すたいや」
 「は、ソビエトさんしての、
 宣戰布告たべかたし、ひ思つたのよ。
 えつとう、「戦争た、日本勝ねねえ」
 つていう、頭あるもんたから。
 いよいよ、ソビエトも攻めてきたんた
 から、それに対し、日本は、
 また、なんのつて、噪つてねわけたへ。
 い、いよ、ソビエトとの
 戰争たなじい。
 倥々、言葉、分ふるねんたをや。
 大人たち、分ふるねんたをや。
 一つひとつ云ひよへ。

37

・父憎み母尊敬

39

一 僕の親父というのは、
「家は、三反百姓で、お前たち
兄弟も多い、敗産は何も分け
ねえんだよ、
「とにかく、借金までもえがら
お前たち、かんばって、学校に入れて
ゆいたらばな、この世の中、きっと
そういうから、学校を入れて、
こう、言われたの。
それで、兄貴も先生だからさ、
兄貴は、尋常高等小学校すが、
終つてねえからさ。それから
僕は、師範の学科さ行つた。
たからさ。

一 頭悪くたつて、本を読んたり
「民主主義」は、なんですか
たんたん、たんたん、考へてきました
ますぐらい
二十七年から、僕も教師ですから
二十ですね。そして、今は
「組合」いうの、二つの、と
言つてゐるけれど、
「黙つてゐる組合」さ入つてゐ
入らせられる状態の中で、
そういう中から、たんたん、
「民主主義」とは、すんう、
い、僕、思つたわ、ろけた
よ、あ、たの、うけた
といふ、たつたの。
死ぬ時によ、僕、思つたわ、ろけた
よ、あ、たの、うけた
といふ、たつたの。

「一年でも長生きする」、と言つて
意味か、分ったのサ。
そして、親父がねエ、
古の時に、親父がねエ、
「冥慈さ征げし」と言つて、親父が
憎たらすぐちつたわけよ、俺は、
二十過ぎてからたいや。
二十過ぎたから、酒を飲めるようにな
つてきてサ。飲んだ時、
親さ、食つて掛かつた事、
あるたゞね。
「親父や、親父たん
「結局、親父はん
死にさ、征げひ俺し
こう話しうすたん
木、掘つたわわ
いや、うたん
云すすたん
かいきや、征
かね親父

勉強好きで、学校に行き、親父の親友が、漢字を書くのが下手で、それで、かんたんに、かわらけた。それで、立派な人間になれた。それで、立派な人間になれた。

うたから、俺、親父さ、
酒飲んで言つたわけよ。

「親父の方、確かに勉強してて…

頭良けじも、

あらぐろ、漢字も書けねえ、

ミミズ這つたような字すか、

書けねえとも、俺は、

いつしかっていいうい、

あふぐろ、偉いといふ見方持てる、」

うかたつすへたけい、親父、

うかたつすへたけい、と、言つたけど、

うたう・俺、いまに言ふよ、

一番、尊敬するの、「おふぐろしきたな。

たのむ！

教師やつて、俺、湯本に居たつた

だ

からね。細井っていふ人がいてサ、旅館の人たつたか、やはり先生すた人で、

あの頃、五十近かつたべ。

「いや、これだけは、あたたさ

言つておくからだ、と。

「俺も教師すたしと。そすてホレ、

川尻駅まで歩いて、

兵庫さ征く、教え子

見送つたド。駄まで行つて、

見つちで、皆、

わやわやてるべ！

その時に、二う行つてたすあや、

へ教え子の片側に身を寄せ、さうと

へ生きて、

周りさう聞けたら

だ

八一九八八·十·十三·

記録
・小原
百麗子

千三忌

児玉智江

子孫の為に、
戦うのだと言つて、

頭の良い 弱い人間は、
殺し合いごっこをして、
破壊ごっこをして、

泣きながら、
終戦を迎える。

そして

また、千三忌を考える。

その繰り返しは、

滑稽ではないか。

(一九八八年 一〇月二一日)

トラ、ライオンの生贊は、
弱い野牛であり、
弱い鹿であり、

タイミングの悪いゾウであつたり。

戦争は、

人間が考えて行動する。

日本の為に、
先祖の為に、

あとがき

死者の位置

・山原麗子

いま、昭和が終ろうとしています。
思ひみれば、この改めた
気持ちなり。この「死」とか「死」を
絶えうとするのですから、妙なるので
す。

。

戦後四十三年、今年ついに、「戦
争体験」を語ろうといふ動きが、多か
つたと思ひます。されば、四十三年前た
つて、やつと語る二とか出来るといふ
思いのためでしょうか。それとも、戦

せいでしようか。
自分の余命か、いくはくもなないと思
った時、人は、「死者」と同じ位置に
立つのではないか、と思ひます。
「去る者は日々に疎し」の「ことわ
ざ」通り、死者は日々忘れられるも
事実ですか、逆に、わたしたちは、日
々、「死者」の位置に近づいたと思
います。

北上市鬼柳町の三田喜代さんのお母
さんは、十年前、八十四歳で亡くな
たといいます。

生前、三田さんが、病床に見舞うと
、戦死した長兄の墓を建ててやりたい
と言つたそうです。

争体験者か老齢となり、今語らね
ば、時間の紧迫感の
語り合ひれどい
う、

長兄は、妻と三人の子を残して戦死、
今は、その奥窓の中には、古い

ます。

三田さんは、「どこに、墓はあるべ
スー、と言ひ、それなら、仙塙を新
しくした方がいいだろう、と勧めたと
言つてありました。「墓もあらへスレ
どは、もちろん、「先祖代々の墓」で
す。

セキさんのお墓石のことを聞いた三田
さんは、亡母の気持ちを推し量つていろ
うでした。三田さんのお母さんは、亡
日常のくらしへ、いつもいつも、亡
き長男を思いつづけた、という二つだけ
ないのかもしれません。か、田形を巡
るようには、「死者」の位置に立つ時、
實に思つたのだろうと思ひます。

八月二十一日、NHKテレビで、「
NHK特集」「八年目の停戦・イラン・
イラク戦争」を見ながら、「武器」は
最初から、人を殺戮するため、生産
するのだろうか、と思ひました。同じ
生産でも、作物ならば、「人を生かす
ために作られるでしよう。

「武器」は生産しても、使用しなけ
ればいいのだが、使用させたる国家が、向
題なのな、と思うべきなのでしよう。
か、「生産」されなければ、「使用」
の有・無はあり得ないでしよう。
武器を生産した者たちか、家族と共
に、夕餉の食卓を囲んでいる時、その
「武器」で、大量の人間が殺戮されて
いるとしたら、そのホーリーを持つ手が

「直接手を下さずとも、直接手を下したように、透けて見えてくるものがあります。」

「武器は商品だから、需要があるればこの国にでも売るといふことあるのでしよう。」

「イラク・イラン戦争」でも、同じ国の製品である戦車が、戦場で対面し戦つことがあります。

イラク人は、イラク人を殺したと思ふっているでしょう。か、イラン・イラク人は、他の国で生産された武器によって、殺戮されているのです。

「こもたつても、いられたら、もう一度持、絶望感とむらしさを覚えてしまうのは、こういう時です。」

イラン・イラク人は、身内、同国人を殺された悲しみの位置で、同盟に戦うべきは、この「武器」との「生産する」戦いでないか、と思つてしましました。

高橋 二三男先生のお母さんは、二三男先生が、少年兵に志願し、合格した時、「母親っていうものよ、おめでた」と喜んで、死ぬが生きるかで、生んだたじや、そすたら、一曰ても長生きしてけろと思うべ」とも言いました。

「二十才たら、なんたって、征かねねたつは、すて、同じ生まれてきたら、早く死なねた」と、とも言つたといいます。

同時に大方の母親も、同じ気持であ

たたかうと思ひます。そしていま、
「子の長生き」を願わぬ母親はいな
でしょ。

戦時中も、戦後も、母親は、同じ位
置に立っています。が、二三男先生が、

「軍国主義」少年であり、た時、「子の
長生きを願う母親」は、國賊となり、
二三男先生が、「民主主義」に目覚め
た時、「子の長生きを願う母親」は、
尊敬する人となつたのです。

わたくしたちは、この事から、様々な

ことを読み取らねばと思ひます。
戦時中、母親の愛情が、父親や、息
子の命に勝てなかつたのは、なぜか
また、民主主義の世の中ではなくては
子の生き長らえることが出来ない
といふこと、ないをです。

「民主主義」は、占領軍によつて、持
たされました、ともいいます。それが、
二の国に根付き、わたしたちの心に育
つたか、どうか。今、向われているの
たとえます。

昭和二十二、三年頃、伊藤まつを姫

たち、「母親たち」は、戦時中の「愛
國婦人会」と同じ工次ルキード、「奉
安殿」で、戦死者の慰靈祭をやろつ
したそうですね。

マツカサ一に、何が言われたか
たか、と向られて、まつを姫は、
「何も来ねの、来ねの。オラたち悪
い」とやつたんでねえもの。レバ答え
てあります。それからまるで、下絵のよ
うに、今の状況と重なります。

それにしても、未子さんのお書きがれた
 「あれ戦死しは、ショックでした。
 敗戦後、十三年振りに故国の大踏
 んだ、元兵士は、その祖いの席から抜
 け出し、自分の命を絶つたのです。
 元兵士は、その位置から、わたくし
 ちに向い掛けけています。わたしたちも、
 さう死の意味の、何てあるかを向ね
 ほなりません。
 もつとも、ろさわしい時頃、
 今いたと思ひます。

へ一九八八・十・三十・記

■ 別冊・おなご・NO6

■ 1988.7.1.発行

■ 岩手県和賀郡和賀町長沼

5-383-3 麗ら舎

■ 麗ら舎読書会

